

かんぎてん

歓喜天

當山本堂の内陣左方には丸い壇があり、その上には赤い丸屋根、円柱型の厨子がある。決して開かれることの無いその厨子の扉の中に、歓喜天はいらっしゃるのである。

・名前について

一般的に しょうてん(でん) 聖天様という名前で認知されているが、正式には かんぎてん 歓喜天という。インドにおいてはガネーシヤの名で広く信仰されている。元々は びなやか 毘那夜迦と呼ばれる、人に害をなす存在であったが、見かねた仏によって改心し、仏法を守る守護神となった。その話は次のようなものである。

・歓喜天と十一面観世音菩薩

びなやか 毘那夜迦山という山の山中に多くの びなやか 毘那夜迦が住み、その主を歓喜といった。彼らは人に害をなす存在であり人間界で悪さを働いていた。そこで見かねた十一面観自在菩薩はその慈悲の心で、歓喜を更生させようと立ち上がった。菩薩は女の びなやか 毘那夜迦の姿となり歓喜に近づいた。歓喜はその身を抱こうとした。すると菩薩は言った。「もしあなたが私の身に触れたいのなら私の教えに従って仏教に帰依し、二度と悪さを働かないことを誓いなさい。そして仏法を永遠に守護するのです」 歓喜は菩薩の言葉に従うことを誓い、そして女の びなやか 毘那夜迦が十一面観世音菩薩だったことを知る。

このような理由から當山では、歓喜天を見守るように十一面観世音菩薩がいらっしゃるのである。

・お姿について

歓喜天のお姿はどの寺院でも秘仏であるため、一般の檀信徒は目に出ることが出来ない。目に出るのは拝む僧侶のみである。しかも、ある限定された拝み方をする時にのみお姿を拝する。その時はお堂を閉め切り、誰の目にも付かないようにする。そのお姿は象頭人身の単身像、または象頭猪頭の二天が合抱く双身象など色々な形がある。秘仏なる理由は、頭が象であるという奇異なお姿であること、抱き合った双身象であることも関係があると思われる。双身象は、男天と女天が抱き合っているお姿であり、男天は前述の毘那夜迦、そして女天は じゅういちめんかんぜおんぼさつ 十一面観世音菩薩の變化身である。

・信仰について

歓喜天が祀られている寺院は決して少なくない。特に祈願寺には祀られているケースが多

い。代表的な寺院は、東京平井聖天燈明寺、奈良生駒聖天宝山寺などである。これらの寺院は別として、歓喜天が祀られていても拜まれていない寺院もある。それは何故か。住職の信仰心云々の問題は別として、歓喜天には怖い話があるのである。「きちんと拜まないと大きな障りがある」「目がつぶれる」「決して関わってはならない仏様である」等々、拜まない理由として十分主張出来るような話は枚挙に暇がない。しかし本当にそんなに恐ろしい存在なのだろうか。

歴史的に歓喜天をみていくと、沢山の歓喜天信者がおり、それも傑物が大勢いる。源頼朝は一千体の歓喜天を鑄造して武運長久を祈り、徳川家綱公、吉宗公、松平定信公、そして伊藤博文、はたまた三井家、住友家、渋沢栄一もまた歓喜天に祈った一人である。これら要人が歓喜天に祈った理由はただ一つ、その絶大なる御利益を確信していたからである。歴代の武将はそのご利益の独占欲から、自分の護持僧以外が歓喜天を拜むことを非常に恐れたという。だから、祟りがあるから、見るな、触るな、聞くな、拜むな、造るなと徹底させたという。そのイメージが今に伝えられて怖い仏様であるという話が出来あがったという説も多分に信憑性があるのではないか。全ては歓喜天の御利益の大きさ故のことなのである。

・ご利益について

古来、歓喜天に祈ればどんな願いでも叶うとされている。まさに現世利益の王者の如しである。しかし、仏教では執着しゅうじやくの心を離れることこそが最も肝要であると説く。一見すると現世利益とは相反するようにみえる。しかし、人間は執着、つまり欲を持っていないと向上も出来ないし（向上欲）、そもそも生存すら出来ないであろう（生存欲）。大事なことは、持つ欲の質であり、その欲をどう使うかである。つまり、清らかな質の欲を持ち、清らかな目的のために使うのである。

ただし、歓喜天は多少無理な、不浄な願いでも叶えてしまうことがあるようである。それは、あえて無理を叶えることにより、その後に襲いかかるであろう災いを身を持って体験させるためである。そして初めて願主は、自らの願いが不浄であったことを知ることになる。これが歓喜天の現世利益であり、同時に罰を与える怖い存在であるということの本質である。何でも叶うということは、実はとても恐ろしいということを認識したいものである。

・お供物について

歓喜天へのお供物は特別であり、大根、酒、かんぎだん 歓喜団（揚げ団子）の三種類のお供物が特徴的である。大根は体に良く健康を保つ食物であり、息災を表す。酒は百薬の長である。団子は巾着型に作り、その形が繁栄、裕福を表わす。

・縁日

毎月一日、十六日

※歓喜団

・真言

オン キリク ギヤク ウン ソワカ
オン ギヤク ギヤク ウン ソワカ

